

* 海外文献紹介 *

子どもと共に笑うということ

Mary Louice Aho

Child Education Oct. 1979

ここに、オレンジジュースをこぼした一人の園児の話がある。

先生は、子どもに厳しい口調で尋ねた。もしあなたが、家でそのようなことをしたら、あなたのお母様はどうなさるかしらね。

その子は、こう答えた。「一つだけ言えば、ママは、そこにはただ立っていないわ。」

このような体験は、子どもと接する多くの者にとって日常茶飯事だろう。子どもは単純なジョークや素朴なユーモアを巧みに笑い飛ばす。つい、こちらもつられて笑ってしまふ。子どもと笑いには、深く考えさせられるものがある。

その手掛りとして、Mary Louice Aho (テキサス大学) の「子どもと共に笑うということ」(Laughing with children)を紹介してみようと思う。

—子どもはなぜ笑うのだろうか？

それはどうも、過去に学んできた概念や活動パターンに矛盾している体験をした時に、可笑しいと感じるらしい。視覚的刺激的現象とおもしろそうな状態を、奇妙な歪んだものとして知覚した子どもは笑うのだという。サーカスの道化師等、子どものお気に入りのもは、お決まりのものからの離脱を代表しているし、マンガもよく矛盾状況を提示している。子どもはマンガを見て、言語を使わずに描写された意味を楽しむが、大人は活字を読み、知的解釈を通して、同じマンガからより洗練された意味を抽象する。つまりそれなりの楽しみ方ができるといふわけで、『ドラエモン』が幅広い読者を有するのもうなすける。

当然ながら、子どもは自らの認識レベルに応じてジョークを理解するが、大切なのは、各理解段階におけるそのジョークを理解しようとする最大限の挑戦的意気込みだといふ。

—教師は、クラスで何をすべきだろうか？

まず、子どもとユーモアを楽しみ、適切な評価を下さなければならぬ。それは、クラスの雰囲気をつくり、子ども達の笑い振りからその子の心身の状態を伺い知ることができるところであり、良いユーモアには良い評価を与えることで、たとえばクラスを笑わせることのできる子どもは、積極的な自己イメージを築き易いからである。

また、クラスに笑いを持ち込もうと思ったら、教師が子どもの認識レベルに応じたユーモアをことばや絵を使って示し、子どもにゲームができる時間や環境を与えるのも良いという。

以上、概要を述べたが、いかにもユーモア溢れる人間が求められているアメリカで書かれた文章だと思わせる節が、なきにしもない。

そこで私なりに、なぜ可笑しいと感じるのかという問いではなく、人が笑った時に何が起こるのか？ という問いをたてて、少しばかり蛇足をつけさせて頂こうかと思う。

微笑、哄笑、泣笑、微笑、失笑、憫笑、嘲笑、冷笑……。大きな辞書に依れば、えんえん列挙できそうであるが、ここにふとした笑いに愛を感じた女性がいる。四国巡礼の旅上、二十四歳の高群逸枝である。

逸枝が疲れて道端の石垣に休んでいると、傍らの小店から出てきた猫の子が、彼女の腕い、だ笠に戯れかかり、やがてその中で寝入ってしまう。その一部始終を見ていた店のおかみと逸枝は、ふと顔を見合せて同時に笑った。逸枝にとってこの猫の子によって引き起こされた一瞬間の両者の笑いは、階級的立場を超えて純粋なものだったという。さらに、人間の善と、その自由な発露を妨げている世俗的なものの存在を感じ、一切の障害物が除かれ

るなら、人間は惜しみなく愛し合うものだと悟ったという。

素直な心から湧き出づる温かい笑みは、人から地位や容姿の差といった外枠を意識から消滅させ、人を共通の基盤の上に立たせる。そこは、窮屈なベルソナを一時脱ぐことが可能で、人間の共通理解を助ける愛の源泉でもある。

この論文には、「子どもと共に学ぶ者にとって実践的な意味のある、笑いに関する研究……」という見出しが書き添えられているが、私は、この論文を通じて、著者の読者に向けた八ここで今一度、子どもと笑いについて立ち止まって考えてみようではないかVという強い呼びかけを感じた。私は、著者について何一つ知らない。けれども、そんな私が僭越にも筆をとったのは、この意図に心動かされたからである。

子どもと共に笑えることは、子どもの世界に接近するための主要な関門の一つであり、愛ある人間理解への貴重な一歩となるだろう。

(柿澤良子)

* 高群逸枝『火の国の女の日記(上)』